

# バルザックの世界

岩 見 至

## 一

13 (岩見)

この作家が世を去つてから百年と少しになる。(Honore de Balzac 1799-1850) 巨大なその作品を前にして我々はそれを如何に評價すべきか迷わざるを得ない。事實文學史の上においても彼に對する見方は變遷を経ており、それはそれとして興味深いのであるが、我々としては二様の見方が考えられるのではなからうか。いわば世界文學史におけるバルザックと日本文學との對比におけるバルザックとである。この區別は便宜的なものであつて無論本質的には揚棄されるべきものと云うべきであらうが、我國における私小説の傳統の根強さを思うとその一應のアンチテーゼとして彼の作品を考えることは無効ではあるまいと思われる。バルザックはその巨大さを云々されな

がらも我國の文學乃至作家には殆ど影響を與えることなしにきた。フランスの自然主義——特にゾラの實驗小説論の手法は明治十年代から既に紹介され、またフロベールの純粹靜觀の創作理念は、藤村、花袋等の作家精神の支柱となつたし現在に至るまで幅の廣い影響を及ぼしている。かつて昭和十年前後、「バルザックに歸れ」という合言葉が我が文壇を風靡したことがあつた。その頃の文壇は大きく二派に分ければ、市民文學側は御用文學化、大衆文學化に對する純文學擁護の氣持と小市民の存在感の稀薄化との奇妙な混合、一方、左翼文學の側では彈壓にからむ政治活動からの脱落に對する辯明と、ナップの世界觀萬能の創作理論への反動との混合とであつた。そしてそれ以後の成行は一連の自然主義作家の復活、武田、高見、丹羽等の風俗小説の隆盛である。久米正雄が云つ

たという次の言葉は、日本文壇の潮流が如何にバルザックの世界と相距たつているかをよく示している。「バルザックの『人間喜劇』も結局作りものであり、彼が自分の製作生活の苦しさを洩した片言隻語ほども信用が置けない。」つまりところバルザックの小説も多彩な筋立てと精密な風俗描寫の面からのみとりあげられ、バルザック自身が意圖し多くの勝れた批評家達がそこに見出した如き、作品を支える思想とその人間性の強烈かつ能動的な性格は全然評價されなかつたものと云えよう。従つてルカーチの云う「バルザックかフローベールか」の二者擇一 (Georg Lukacs, Balzac und der französische Realismus, 1952.) も、多少形式的圖式的なきらいはあるにしても無意味ではないのである。

## 二

當面の目標はしかし、バルザックのいわゆるリアリシックな面を強調することではない。普通に佛文學史の上では十九世紀の始めに浪漫主義があり、次にバルザックのリアリズムが到來する。これが尖鋭化されて自然主義に連なるとされている。リアリストのレッテルを貼ることは容易であるが、その内實が不明であり、問題であ

る。バルザックは巨大であるだけに數多の要素や矛盾を含んでいる。今若干の考察を試みようとするのは、作品「絶對の探究」を中心とする彼と科學乃至哲學に關する問題である。

常識的に哲學という言葉は二様の意味を持つてゐる。學としての哲學と人生觀乃至世界觀としての哲學と。前者は専門家のものであり、後者は人たる者皆それを所有しうべきものである。此の意味で凡そ文學作品に何等かの仕方で作者の哲學が表明されるのはもとより當然のことである。しかしバルザックの場合はそれ以上に意圖的なところがある。先づ作品の構成が方法的である。前に作品を支える思想ということを云つたが、これがその一つの意味である。

周知のようにバルザックの全作品は人間喜劇 *Comédie humaine* の總題の下に、九十五篇の小説が數個の主題の下に分類して收められている。今その主題を示せば、「私生活情景」「地方生活情景」「パリ生活情景」「政治生活情景」「軍隊生活情景」「田園生活情景」「哲學的研究」「解析的研究」の八つである。そしてこの九十五篇の小説中實に七十七篇が當代描寫に屬し、僅かに十

八篇が王政復古以前のフランス乃至外國を舞臺にとりし  
 かも餘り重要でない作品群とみられる。更にその七十七  
 篇の多くは王制復古前後を舞臺にとつていることから  
 バルザックの意圖が極めて自覺的であつたことがわか  
 る。視點を過去へも未來へもそらさず専ら現代に執する  
 ことは無論作家の性格ということもあろうが、バルザッ  
 クの場合はその思想に基いている。一八四二年に彼が付  
 した人間喜劇總序が述べるように、人間喜劇の題材即ち  
 社會は動物界プラス何物かである。動物は現在に生き  
 る。されば何物かがたとえ何物であるにしても現在の人  
 間を知るにしくはない。前述の八つの主題のうち始めの  
 六つはいわば動物の生態學と云つてもよい。自然が動物  
 界に多くの變種を創つたように社會は多くの人間種をつ  
 くつた。當時のフランスの政界變動の激しさや、資本主  
 義擡頭期にある首都パリ、或いは舊制度の解體に苦悶す  
 る田園地方、更に當時における軍隊の特殊な性格等を考  
 慮すると、この生態學的分類も頗る適切なものであるこ  
 とがわかる。このような點が逆にまた(一)にのべたよう  
 にバルザックを誤解せしめる一因ともなつたのである。こ  
 の生態學の目標は、再び總序の言葉を借りるなら、「惡  
 徳や美徳の財産目錄を作製し、情熱の主要な事實を蒐

め、性格を描き、社會の主な出來事を選び出し、均質な  
 多數の性格の屬性の統一によつて典型を構成し、かくす  
 ることによつて恐らく歴史家に忘却せられた歴史——風  
 俗の歴史 *histoire des mœurs* を描寫する」ことである。

これは或意味でロマンチックの前のクラシックの手法に  
 近い。現實社會の善と惡、情熱的な事件、社會的な事件  
 を取材の對象にとり、次々にその創意になる性格を描  
 く。最後に數種の性格の屬性をあつめてタイプを組合せ  
 る。人は直ちにモリエールを思い浮べるであらう。又、  
 批評家はしばしばシェクスピアをも引合に出した。ただ  
 バルザックの人間は單なる人間ではなく身分を持つた人  
 間である。身分とは「自然プラス社會」であり、性格は  
 自然ではない。彼はこれをウォルター・スコットに學ん  
 だのである。

さて生態分類が出來上るとテーヌのいわゆる「博物學  
 者の眼」は閉ぢらるべきである。(Hippolyte Taine, Balzac  
 1856) 次は何をなすべきか。ハンスカ夫人宛の書翰でバ  
 ルザックは次のように述べている。「さて次の段階は哲  
 學的研究です。結果の後には原因が來ますから。風俗の  
 研究で感情とその行動、生活と生活の風習とを描きまし  
 たから、哲學的研究では、何故感情は——、何によつて

生活は——、とか云うでありましょう。」之がすなわち主題の第七番目「哲學的研究」である。(最後の主題である「解析的研究」に屬する作品は極めて少いし、その主たる作である「結婚の生理學」に示唆されるエネルギー論は或意味で哲學的研究に含めて考えることが出来る。)かくて人間喜劇全篇は、人間性の現象記述とその現象の背後にひそむもの乃至動因の探究という次元の異なる二段の構成からなる。

哲學的研究に屬する作品は二十篇ある。今その標題を掲げると、あら皮、絶對の探究、セラフィタ、フランドルの基督、和解せるメルモット、不老長生藥、ルイ・ランベール、追放者、別離、徵募兵、エル・ヴェルデユゴ、知られざる傑作、マラナ、海邊の悲劇、赤い宿屋、ルネリウス師、呪われた子供、ガンバラ、マシミラ・ドニ、カトリヌ・ド・メディチ朝の諸篇である。大半は短篇であつて何等かのテーマを有してはいるが議論めいたものでなく——當然のことであるが——長篇のうちでも比較的議論の多いものはルイ・ランベールである。一體バルザックに關して普通にとりあげられるのは、先に述べた二段構成のうちの生態分類の部分であることが多い。困難なことではあるが彼の作品中の傑作をえらべと云われ

ると、私生活情景の「ゴリオ爺さん」、地方生活情景の「ウジェニー・グラन्द」、パリ生活情景の「從兄ボンヌ」と「從妹ベット」があげられ、更に地方生活情景の「幻滅」や田園生活情景の「農民」等が指摘されるのが普通で實際それ等は傑作であるし、又、如何にもバルザック的であり、それに對し哲學的研究の諸篇は短篇が多く、「ルイ・ランベール」のように未完成の姿のものもあるが、全體としてバルザックを考察する場合には矢張り無視出来ない部分であらう。批評家諸家のうちでは、チボーデが比較的この部分を重視して次の如く述べている。(Albert Thibaudet, Histoire de la Littérature française de 1789 à 1850) 「——哲學的研究が『人間喜劇』の肝要な部分をなして、そのアクロポリスのように聳えていることが感じられる。その小説が一つの實證哲學によつて、一つの世界觀によつて貫かれていような大小説家はバルザックひとりである。」そしてそれに續いて、「彼はそれを哲學の傳統から學ばずに神祕主義の傳統から承け繼いでいる」と云う。しかも彼が神祕主義者にみえないと感心している。この點に關してはテヌスも、バルザックは唯物論者で神祕主義者だ、當時は顯微鏡を離れると神祕主義者になる者が多かつた(テヌス、同上)と

と云っているが、テーヌは勿論神秘主義者という言葉に皮肉な響きを与えている。成程、哲學的研究に屬しない作品の中でも神秘主義者、神秘主義的言辭にはしばしば遭遇するのである。(例えば「谷間の百合」を見よ)彼が神秘主義者殊にスエーデンボルグやサン・マルタンに關心を有していたことは數多くの傳記者批評家の認めるところである。「セラフィタ」は彼の抱懷する神秘主義の行きつくところであり、チボーデはその出發は「あら皮」にあり、中間に「絶對の探究」をみている。

「あら皮」。名門出身の貧乏青年ラファエルが、自殺寸前手に入れた一枚の革は欲望實現の魔力を持つが、同時に所有者の生命を縮める。彼はそれによつて實現せられる現世的幸福にも拘らず肺患に犯され、最後に戀人の肉體的魅力に呼び醒された欲望の犠牲となる。救いの道として老人が説くのは、あらゆる欲望を絶つ東洋流の方法である。老人によれば、「感情を殺して長生するか、情熱の殉教をよろこんで早死するか、人間のとる道はどちらかだ。」この作は彼の世界の兩極、即ち實證科學的立場乃至唯物論的現世幸福の立場と神秘主義——その前段階としての諦念とを含んでいる。前者の方向を更に現實的に究極まで徹底するものとして「絶對の探究」のバルタ

ザル・クラスが存在する。

クルチウスのバルザック論 (E. R. Curtius, Balzac 1923) は極めてドイツ的な表現形式であるが、彼は人間喜劇における情熱の型を三つの段階にわけてゐる。曰く享樂家、曰く蒐集家、曰くファウスト的探究者。享樂家乃至道樂家としてはユロ男爵やクルヴェル區長があり、蒐集家の典型としてはボンヌやマギュス、探究家の代表としては絶對の探究」のバルタザル・クラスや、「知らざる傑作」の畫家クレンホーフエルなどがある。

「絶對の探究」はもと、ルネッサンスの著名な陶工であり化學者であるベルナル・パリッシを主人公として短篇たるべく意圖せられたが、諸々の事情で實現せず、後にポーランド人ヴロンスキーなる人物が——これは軍人であり科學者であつて一八一八年乃至一九年頃のジャーナリズムに著名であつたらしい——バルザックと相談つてかれはこれに多くの示唆を与え、始めて偉大な空想家バルタザル・クラスが構成された。このヴロンスキーなる人物は作中アダン・ド・ヴェルチョフニヤなる名の、矢張りポーランド軍人として登場している。この作品は哲學的研究の中では勝れた作品としてしばしば言及されるのであるが、一つには中に示される化學上の發言

が理解しがたいためであるのか、具體的な作品批評殊にその化學論にふれたものはあまり見當らない。併しバルザック自身は努めて當時の化學書を読み又化學者とも交つて研究していたのである。(Cabanès, Balzac ignoré, 杉山英樹, バルザックの世界, 山田珠樹, 現代佛蘭西文學研究)

### 三

バルタザール・クラスはフランドルの名門に生れた貴族である。パリで學問修業の仕上げと社交訓練に出入りしたなかに、ラヴォアジエとエルヴェシウスの名があつた。殊にラヴォアジエの下では熱心な弟子として化學の研究を行つたが、今では故郷に歸つてクラス屋敷の主人となり一七九五年にはジョセフィンと結婚して娘や息子も生れ、平凡至極なしかし平和な生活を送つてゐる。この屋敷には美事な美術品の蒐集があつた。この家にもフランドル氣質特有の偏執と熱愛の血が流れていることを示す。バルタザールの父は現にチューリップの蒐集で評判であつた。さて一八〇五年に至つてバルタザールに變調がみられた。家庭内のことに少しも氣を配らぬのである。のみならず裏の屋根裏部屋で何事かなしてゐるらしい。とかくするうちに、ドゥエーの町で、噂が擴

がり始めた。バルタザールは哲人石を探すために色々實驗したりしてその費用のために破産しかかつてゐるといふのである。驚いて妻は夫に確かめるが、彼は微笑を以て答える。「破産だつて？ あしたになれば、我々の財産は恐らく無盡藏になつてしまふだろう。今日ね、まだ未発見のかなり大事な事柄を探しているうちに、炭素を結晶させる方法を發見したように思うのだ。炭素というのは金剛石の本體だよ。なにもう四五日もたてば、お前はわたしがぼかんとしていたことを赦してくれるようになるよ」。

こうした道にバルタザールを踏み込ませたのは實は一人の男であつた。一八〇九年に前述のヴェルチョコフニヤがクラス屋敷に泊り合せたのであつた。彼は貴族であるが貧乏であるために好きな化學研究が出來ず、止むなく軍人になつた男であつた。その彼が、同好の士と知つてバルタザールに創造の祕密をとく鍵の近きにあることを吹き込んだのである。ポーランド士官の不思議な魅力を持つた言葉に壓倒されて、バルタザールは舊師ラヴォアジエが一度やりかけたが止してしまつた方向に進み出した。「私は金屬をつくる、ダイヤモンドをつくる。自然がする通りの仕事を私もするわけだ。」

さて併し現實はそうやすやすと創造の祕密を解き明してはくれない。借財は雪だるま式に増加する。時には妻の涙ぐましい協力を得、時には妻の愛情にひかされて、實驗を中斷したりする。しかもその度毎に情熱は前より一層大きくなつてゆく。一八一六年遂に夫人は苦惱のうちに病歿する。後半は娘マルグリット及びその周囲の人々が苦難をのり越えてクラス家を再建してゆく過程である。その間にマルグリットの美しく健全な戀愛事件も織り交ぜながら、再度の破綻、復調等を経、遂に念願成就せずして世を去るに至る、一箇の家庭悲劇であるが、主人公クラスを始め、その妻娘老僕に至るまで、心理の動きが精密に分析され、心理悲劇小説として勝れたものとなつてゐる。唯一筋の情熱に動くロマンチック偏執狂として描かれてはいるが、しかも彼の中の人間感情は時折慈愛の面を犠牲者たる周囲の妻や娘に流露せしめ、ねぎらい、希望を約しその憂を少くしようとしている。研究室の破壊、移住等の迂餘曲折、それに應ずる情熱の熾烈化は、最後にエウレカ(みつけた)と叫んで眼を見開いたまま無念の想すさまじく息をひきとる終焉を極めて自然に導出しており、全體の結構は古典の五幕配置になぞえられるばかりの整然たる姿である。文體も極めて

適切で小説としては充分みごたえのあるものとなつてゐる。ファウスト的と名づけるにふさわしいバルタザールの探究振りであるが、そのバルタザールをとらえて離さなかつた「絶対」とは何であるか。この點に多少の光をあてるのが、バルタザールの異常な執念振りをより一層リアルなものにすると思われる。

この場合「絶対」は當時の物質觀に、更に遡るならば中世の鍊金術に關係してゐる。(以下化學史に關してはTheodor Svedberg, Die Materie. Ein Forschungsproblem in Vergangenheit und Gegenwart 1914. 参照)

鍊金術の歴史は古い。アレキサンドリアがローマの治下に入り、その學術が衰退に赴いた時期の產物で、エジプト傳來の技術にギリシャの自然哲學が加わり、更にこの衰退期の神祕哲學を背景として持つ混淆物である。バルザックが神祕主義に對して非常な關心を有しており、かつ又彼の思想の一極をなしていることは既に述べた。十八世紀の末頃になるとあれ程力強かつた鍊金術の迷妄もついに形骸を保つのみとなり、十九世紀に入つてはもはや一個の滑稽物と化し、最後に金屬を組成物とみなす考えがラヴォアジエとその時代を以て消え失せるに及んでそれは死滅した。併し鍊金術の誤謬が一般に認識され

たのは随分後になつてからのことで、たとえばフリードリッヒ大王(一七二一——一七八六)さえも錬金術師の保護者であつた。そういう事情と、加えてバルザック自身十八、九世紀的科學の愛好者であつたということから、彼が情熱の主人公に化學者を想定したことは意味深いことと思われるのである。

さて錬金術で代表せられる中世の物質研究は、如何なる點からみても自由な眞理探究ではなく、唯一つの思想に盲目にされていた。即ち金屬轉換がその合言葉であつた。卑金屬を貴金屬に轉換し、それによつて無限の富を得ようとしたのである。十三世紀に入るとバルタザールの屋敷のあるあのドウエーの町で噂になつたという哲學<sup>ラベス、フイロフォルム</sup>石<sup>ラベス</sup>が重要視されてくる。このものを熔融した金屬又は水銀の上に投ずると次第に金に變化してゆくという。少量の哲學石が非常に巨量の金を製造する作用を持つと云う考えは、金屬轉換が一種の染色であるという古來の信仰に基いている。鍊金家は物質の根本的研究には無益ではあつたが、哲學石の原料、第一物質の無計畫な探究に際して、偶然から色々重要な實用的化學知識を得ていた。アリストテレス四元素たる水・火・空・土に對して鍊金術の元素は硫黃・水銀・鹽であつたが、その他

多くの元素が知られるようになった。バルザックの頃までは、この作品に述べられるように五十三の元素が知られていた。

ところでバルザックの化學觀乃至物質觀と云つても、此の作品のあちこちに豊富に述べてあるのでなく、ポランド士官ヴェルチョフニャの口をかりて集約的に述べられている。

「アラビヤゴムや砂糖や澱粉を粉末にすると、相互に全く似通つた物質が生れて、同一の定性結果が得られる。一見したところ互いに随分異つているこの三つの物質の類似から、私は自然が創り出したものは悉く、同一の元素を持つべきであるという考に到達しました。近世化學の業績は、自然作用のごく廣い部分にわたつて、この法則の眞理なることを證據立てております。化學は造化を全く二つの別個な部分に分ちます。つまり有機界と無機界ですね。——ところで分析によつて、有機界のあらゆる生成物は四つの元素に還元されました。そのうち三つはガスで酸素、水素、窒素、いま一つの元素は非金屬性の固體、すなわち炭素です。反對に無機界は元素の数が五十三を數え、その種々異つた結合によつて、無機界に屬するすべての生成物が形づくられるのです。よ



り少い結果が存在するところに、より多い手段があるということは、ありうべきことでしょうか。だから私の舊師の意見はこうなのです。つまり、これら五十三元素には一つの共通な原素がある。<sup>フランス語</sup>——假にしばらくそのような原素を認めるとすれば、われわれは一元的の化學を持つことになりましょう。有機界無機界は多分、四つの原素を基礎とすることになるでしょう。そして、われわれが若し遂に窒素を分解するに至れば、われわれはもはや原素を三つしかもたないことになる。するとわれわれはすでに古代人のかの偉大なる三元に近づいている。昔の鍊金學者は黄金を以て分解出来るものとし、従つて製造しうるものと信じていたが、彼等も金剛石の前には逡巡したのです。われわれはしかし、金剛石の組成の性質と法則を發見しています。

あなたはラヴォアジェの弟子です。あなたには私が推測しえた事柄をお傳へしてもいいわけです。私は次のようなことを明かにしました。第一物質は三つのガスと炭素とに共通なひとつの原素<sup>フランス語</sup>であらねばならない。手段は陽電氣と陰電氣とに共通な原素であらねばならない。

——絶對というこの原素によつて、同一の環境におかれた、全然似通っている種子が、ひとつは白色の夢を生

じ、ひとつは黄色の夢を生ずるとは！『神は最も簡單な手段でもつて萬物を造り給うた』こう信じることより以上に、神に關するわれわれの觀念に適合するものが外にあるでしょうか。

——鍊金術という高等化學を何かと云えば禁止したがる無智な輩は、慥かにこれらの偉人が情熱をこめて從事した研究を我々が正當なものにしようと骨折つてゐるのを知らないんです。——」

具體的にバルタザールが日夜苦心を重ねているのは、炭素を純粹に結晶させて金剛石を造り出そうという仕事である。この實驗はすべて失敗に終つてしまつた。一八三〇年代當時としては自然のことで、これは鍊金術師の魔術にすぎず、そうした事態の下ではバルタザールのアイディアに無慙な失敗を繰り返させ、自身の像を混亂したグロテスクな天才のひとりヴェルチヨフニヤとして描かねばならなかつたのも當然である。しかるにこの小説が出て約二十年、一八五二年に至つてフランスの大化學者アンリ・モアッサンが見事にこの實驗に成功した。モアッサンは高熱電氣爐の發明者であるが、その中で鐵を溶かし、三千度乃至三千五百度に熱した鐵に砂糖を熱し

て精製した炭素を溶解し、急冷する。すると炭素は鐵の中で金剛石に變化する。之は實用に供しうる程のものでなく、實用化は一九〇〇年代を俟たねばならぬが、ともかく炭素(無定型)の結晶によつて金剛石が實現したのである。つまりバルタザルは眞理の予感に對面してはいたが、實現すべき現實的手段を持たなかつた。電池を使つたり、太陽光線を利用したりしているが、結局高熱をつくり出す裝置を持たなかつた。科學と技術との一般的レヴェルを飛越えることは出来ないからである。従つて當代の讀者は知らず、現代の我々には、バルタザールのつまづきも、妻ザエゼフィンの「呪われた科學! あなたはサタンの犯した増長慢の罪を犯しているんです。神様に背いているのです。」と云う痛嘆も共により一層現實味を増すことになる。

より一層肝要なのは原素についての考え方である。原素は *principe* の譯である。この譯語はバルザック研究の權威である水野亮氏の譯を借用したものであるが、にわかに適譯を決め難いように思われる。それと云うのもヴェルチヨフニヤの語る物質論が充分の明瞭さを缺いているからでもある。原素は時に化學用語としての元素(*element*)であり時に第一原因(*Causa prima*)である。有機

界のあらゆる生成物は四つの元素に還元されたとか、無機界の元素は五十三あるとかいうのは無論今日の科學からすれば當り前、乃至幼稚なことであるが、當時としては正當な考え方である。前にも述べた如く彼はこの作を書くに當つては當時の化學書をよく讀み、かつ著名な化學者の教をも乞うている。當然のことながら彼の創意も交えられており、獨斷と偏見もみられはするが、素晴らしい着想もある。

十七世紀に Boyle は、もしある物質がもはやそれ以上簡単な成分に分解されなければ、その物質を元素とみなさなければならぬ、という定義によつて古代の四元素、錬金術の三元素説を決定的に打破した。一般に物質を論ずる三つの大きな視點は、單一な物質種(『元素』と、夫等の相互作用、及びその内部構造であるが、Boyle は第三の問題についても原子論的な想定を下している。これはその後 Doolton (一七六六—一八四四)によつて展開せられ、物質は原子から構成されており、原子は各元素について夫々に等しく諸性質、殊に質量に關して不變であるが、他の如何なる元素の原子とも異つてゐるという假定でそれまでの諸法則を説明した。杉山氏は、バルザックは化學元素が絶対不變のものであると考

えていた十九世紀を通じての學定的説を意識的に疑つたがこれは素晴らしい創意であると稱揚されている。というのは我々の今の化學では、多種多様に區別されている元素は全く「一樣な本性」のものであるという認識に導かれている。何故かと云えば化學元素はすべて正及び負の電氣的粒子から組成されていて、ただその配置と數が異つてにすぎないとみなされているからであると云われる。しかし之は化學的性質と物理的性質を混同した議論のように思われる。成程放射能現象はあたらしい化學元素への變脱ではあるが、鍊金術の意味における轉換<sup>トランスムタチオン</sup>ではない。一つの金屬を他の金屬に變化させることは出来ないのである。それはわれわれの外部からの働きかけを俟たずに、動かし得ない必然性を以ておこなうのである。のみならず、バルザックはこれら五十三元素にはひとつの共通な原素があると考えれば、われわれは、化學をもつことになると書いているが、此の言葉自體甚だ鍊金術的色彩の濃いもので現在では歴史的用語としてしか意味を持たない。

併しまた彼の天才がその勝れた能力を豫感せしめる言葉がないでもない。「窒素を分解するに至れば——窒素は當然否定的存在とみなさるべきものであります」と

いうところである。化學的方法で窒素が分解しえないことは既に明瞭であつた。彼はむしろ物理學的な破壊の意味を匂わせている。一八三〇年代の科學理論にとつて異常なまでに獨斷的であつたこの意見は、一九一九年ラザフォードの窒素核の破壊成功によつてその可能が證明された。

又、極めて漠然とはあるが、原素のうちに陽電氣と陰電氣とを一應包含させている事實をみると、ギリシャ哲學出發點のタールス元素論以來探究されてきた、一切の感覺的に知られるものの統一的原質は遂に電氣的なもののうちにつきとめられた、という見方にバルザックの「共通な原素」をあてはめたくなるようである。

カバネ博士は、バルタザールが絶對という名稱を與えた物質構成の單一性は、近代化學によつて豫感されていとみている。またバルザックは化學の絶えざる進歩は元素を増やす代りに減らそうとしていると考えていた、と解している。評價を與えてはいないが、矢張り原素を二様にとつているとみられる。

#### 四

物質の構造の問題以外にもバルザックは當代の科學の

成果を會話の端々に匂わせている。「生命はすべて燃焼を含む」という言葉にしても單なる比喩でなく、當時化學に於て燃焼の理論が明らかにせられたことと無縁ではないし、「電氣は他の如何なる獸類におけるよりも一層變化ある組合せてよつて、人間に現われてはいないだらうか」という問も漸く興つてきた電氣生理學と關係がある。彼は可能な限り實證的であらうとした。バルタザールを如實に描き出すために、他のすべての作でそうであつたように、彼の住居、ドウエーの町、フランドル人の氣質に至るまでのありとあらゆるミリユーをゆるぎなく敘述したが、科學上の會話にも同様の意を用いたのであつた。「あら皮」においてしばしば人は科學の無力の戲畫化をみるが、彼は決して科學の無力を文字通り信じただけではない。むしろ科學に對する信頼においては十八世紀の啓蒙哲學者たちと肩を並べるであらう。ただ彼は啓蒙哲學者ではなくカトリック教徒であつた。妻のジョゼフィンが「あなたは神様を否定していらつしやる」と仰天するが、その時にのみ科學は墮ちるのである。

バルタザール・クラスは遂に絶對を發見しえなかつたが、バルザック自身はどうであらうか。テーヌは云

う。人間の本性が理性であるなら人はコルネイユの如く寛容と美德を描き、若し肉體であるならばルーベンスの如く肉欲と筋肉を畫き、感性であるならばディッケンズの如く涙と繊細な感情を描く、と。そしてバルザックにおける人間の本性は力であるとすれば、身を滅すばかりの大いなる情熱の行程を描いたのは尤もなことである。ルイ・ランベールがそうであり、ラファエルがそうであり、ゴリオ爺さんがそうであつた。クルチウスは力をエネルギーという言葉で云表しているが、「結婚の生理學」でバルザックは次のように述べている。「十八世紀の著作家達は社會に對して測り知れぬ奉仕を遂げた。だが感覺主義に依據している彼等の哲學は人間の表皮以下には進まなかつた。——思想の神祕の研究、人間靈魂の諸器官の發見、その勢力の諸現象——最後にその動力學の法則とその肉體的影響の法則と、之等が人間的諸科學の寶庫への來るべき世紀の輝かしい寄與となるであらう。」ここでは人間の心的エネルギーが問題になつてゐる。之は生命のエネルギーの一形式である。生命のエネルギーはまた宇宙のエネルギーの一狀態に他ならぬ。心理學的エネルギー論は必然に自然哲學的形而上學的エネルギー論を伴つてゐる。之をバルザックは種々の方法で捉えよ

うと試みたが、「絶對の探究」では化學的解釋が企てられたわけである。一切の生は一個の燃燒過程である。礦物、植物、動物とこの過程の程度に生命の持續が依據する。高級な生物になる程迅速な燃燒に曝されており、その最高段階に創造能力 $\parallel$ 思惟を備えた人間が立つ。人間において宇宙のエネルギーは生命の燃燒過程を通して諸々の觀念に轉化するのである、之等諸々の觀念——生命の流れ、流體、意志、思惟、能力、觀念等をバルザックは宇宙と人間との活動しているエネルギーを指すために使っており、それについては「ルイランベール」「セラフィタ」に立入らねばならぬが、別の機會にふれたい。

(本稿は秋季大谷学会講演要旨を訂正加筆したものである)